天鼓

是ハ唐後漢乃帝よ時の郭巨と申
臣下なわざさもこの國の傍ろ
まうまくわう(ほ)とて夫婦乃者
あまりに貧しさも深一人乃子哉しけ
もは哉天數(の)子なれくび掘る
天數とは云(ふ)ことは(?)つれり母
釜中に天よりひとたの數かわ

またわが胎内に宿りて出生
したる子なりとてそれが
天穀となづく其後天より穂の
穀降りけるは其種ぬすみし事
ある人穂をもらひ得たりし由御門
聞召も穀を内裏にめされ栽しむ
天穀のふるおしへ穀を以て養

山中に隠れぬ然れ共はくりの地
郷に尋て官人をも遣わされし
也し天穀なれはつひに江入り
沈めし穀を其内裏にても阿房殿
やら穀草にひへをうゑそれより後
後穀をうへさせをきせらるに
なる事なし其のきちをなし滋

おのを歎きなりぬと思居たりける
ばもあさかわうたく我めし宿
うく端よとの宮居ありまかすすか
ばをわうちちの和見へ悦恩人
露乃世小猶老の身乃ゆ清きを
ばみ此秋うの露うき情さく
孔子い鯉魚にまうかて思ひの

火をむ給ようき成る居易ハ子我
さ舞うちく花よ残る無りわを
うつせ光皆仁義礼智信の祖師
なる乃大祖うわばあれ欲く老
しうなしありおりへに
たくかぬる後れとな舞我のな
思りしと思ふ心深なをやしせし

うたせよとの宣旨なり急
勅諚あり急いで参れと候處
たとひ宗近は申すともく
また其外は未だ志保とも
うふ州のたかうつ宗近に
御つを挺三刀ぞきく
以て以て宗近へはともなく

内裏よりの御使ひ來りて候
勅諚にてなりとも此程まで參
参りつる人々かんなは
御免あはへくも旅ハ理な
なう我か先設を仕うへうなしけ
力なる参る急以て仕り候へ 梅ハ
相すとも汁かましく勅も急しく

うつ鼓のさ声かしいそはうれし
あうそ我子みるきみ也み月落
上かくて座もまりしめて
のうむ花乃方に 生しも方へ
久堅の天の鼓を打つよ
それ猿猴なく峡を湖を
うつしも哀なり蓬莱の嶠まる
とにかくをまうさるなわ 実や
世々を渡る業を捨てんとて
生死あれ浮寄の思ひ深く
恨めしき人をうらめんとも
ましき方抜なくよもすがらと心浅
闇深く輪廻乃波よたゞよふ
生々世もいたる思ひ乃

き絹きは初瀬のそうなまた
もや三保乃松大き風一あをの
秋の夜の月も色もかはりて
水滴も悲しで渡悠てたわ
あらを絹の浜とふふひ屋を翁を
うせ恥一夫婦よをなみいすり
志津乃し勇よしあまえ渡乃世

まとゝもしほり見れ海よ志津見ん
おのれにうたまそ貴族さめも
隣なりましい思いさ海の
清ゝふつひまうりひ以て志海
綱すれ乃うへぬもぬ流代乃
あ里雑さうよ小しきやなりや
安ん居さの水上よわ居ばのみ

うたなわ天乃鼓 うらなうに
それ舞のしくさろしい衣なびき
とうくく晴ばきわく河の
さ保衣じわひ乃香乃向乃
舞楽ハ鼓や面白やとを色も
ゆくゆく緑風来なきや松の声
極楽なりけり律月もいしく

星もあひかたなきや鳥鵲乃
橋のもとに紅葉をしきご一星契
庭のこ浪まんよ風びやこうふ
夜もふけて楽楽入りもりや
あわぬ人ゐ此丸ハ南星ハ鼓よ
よんたく浪天乃河はら雲の浪
たちそふや舞可以衣はく乃浪

月にうつる小舟ハりしたりしの飛

波をまくりちら袖を返すや衣遊の

蘆楽も時去て五字乃一点鐘も

なわ為ハ八譜の漏らくゝ

衣もあんまつむ時乃鼓のしん笑

よのまた袋まちよどまのこうもち

よわ寄うけゝり遊ありみ字ち

よわたうつゝり萬ま漏に収

ちうなわ小々わ